

日原牧場を創設した。明和5年〔1768〕6月23日歿。

注(7) 「蔵王山麓風物誌」(菅野新一)に『オオカミは……昔、片倉家で経営した蔵王山麓の七日原の牧場に夜な夜な現われて、子馬を襲った。これには牧場の見張番を命じられていた新地の木地屋たちも、なんとも困ったという。なにしろ、夜行性のけものなので、玉が一発しか詰まらない火縄銃では仕留めることができなかった。』とある。これと全くの同文が、「蔵王山麓のけもの」(菅野新一。「白石市史」2の内)に載っている。

注(8) p. 148注(1)参照。

注(9) 狼をいう。

注(10) p. 96注(6)参照、p. 388「139. 早川智寛の生年はいつか」をも参照。

資料 片倉代々記(「白石市史」4の内)

畜産業(尾山通男。「宮城県史」10の内)

狩猟(小原 伸。「宮城県史」20の内)

郷土物語白石地方の歴史上巻(阿子島雄二)

蔵王山麓風物誌(菅野新一)

蔵王山麓のけもの(菅野新一。「白石市史」2の内)

東北産業経済史第1巻仙台藩(東北振興会編)

七日原における土地利用の変遷(村山 馨。「奥羽山脈の研究」(宮川善造編)の内)

東遊雑記(古川古松軒)

52. 仙台の医学館と青柳文蔵

問 「東一番丁物語」(柴田量平)の37頁に、次の記事があります。『現在の憲兵隊所在地〔戦前。現中央警察署〕には、元と藩の医学館が建っていた。医学館は、東磐井郡松川村の青柳文蔵⁽¹⁾(諱は茂明)と云ふ有名な医学者が経営に[×]挙〔與〕って居た。』これは事実でしょうか。

答 元文元年〔1736〕11月1日、北三番丁細横丁西南角に創設された学問所が、宝暦10年〔1760〕北一番丁勾当台通に移され、安永元年〔1772〕7月11日「養賢堂」と称せられ、儒学をはじめ文武の実学も講ぜられ医書の講釈も始められました。更に文化7年〔1810〕学頭に任ぜられた大槻⁽²⁾平泉が、学制改革を図り、医学校の分離独立が実現されることとなります。文化14年〔1817〕1月、国分町伊勢屋儀兵衛が建築費用を調達上納して、赤井横⁽³⁾丁傍の東二番丁に竣工、渡部道可⁽⁴⁾が初代学頭となり、漢方医学の講述のほか、文政5年〔1822〕には、いち早く蘭科も創設して幕末に至りました。これが仙台医学校で、青柳文蔵は全く関与していません。また、文蔵は医学を修

めたことはあるが、有名な医学者などではなく公事師〔くじし〕⁽⁵⁾ だったので。これらの点を「東一番丁物語」は、誤まり記しています。

医学館と青柳文蔵とのかわりが出てくるのは、天保2年〔1831〕、文蔵が江戸で集めた和漢書の良書善本2,885部、2万50巻、9,937冊に資金1千両を添えて献納し、その書庫が、医学館構内に付設されることになったためであります。この文庫は「青柳館文庫」と称せられ、一般にも公開されました。しかし、幕末明治の激動期にその大半は散逸し、僅かの部数が、宮城県図書館に継承⁽⁶⁾ されています。松崎謙堂〔こうどう〕⁽⁷⁾ 撰の「青柳館文庫碑」⁽⁸⁾ も同時に滅失し、僅に残⁽⁹⁾ っていた書庫土蔵も、昭和20年7月10日の空襲で全壊してしまいました。

注(1) 「仙台人物史」(今泉箕洲)に、次のように記している。

『青柳文蔵 万巻ノ書ヲ積ミ千金ノ資ヲ重ネ之ヲ不報ノ地ニ施シテ後世ヲ益ス爵禄ノ人ト雖モ猶難シトスル所ナリ而テ今之ヲ眇ター一処士ノ身ニ得タリ青柳文蔵是ナリ文蔵名ハ茂明東里ト号ス父ヲ三達ト云フ東山ノ人医ヲ業トス文蔵常ニ以為〔おもえら〕ク医ハ意ナリ聡明ナラサレハ其意ヲ会スヘカラスト乃チ江戸ニ出テ井上金峨ニ從テ経業ヲ受ク金峨其才ヲ愛セトモ貧ニシテ之ヲ養フコト能ハス文蔵以為ク書ヲ読ム須ラク資ナカルヘカラスト是ヨリ鋭意貿易ニ從事シ家道頗ル安シ書千余巻アリ且読ミ且賣ス十余年家資万金ヲ累ネ書籍二万巻ヲ得タリ時ニ文蔵齡已ニ高シ以為ラク吾今ニシテ之ヲ読ムモ能ク成ルナシ之ヲ世ノ学生貧窮ニシテ志ヲ抱クコト余カ少時ノ如キモノニ読マシムルニ若カスト因テ藩ノ有司ニ乞フテ曰ク市井ノ臣文蔵々書二万巻アリ願クハ府下ノ地数歩ヲ賜ヒ一庫ヲ造リ此書ヲ蔵シ士民ヲシテ広ク之ヲ読マシムルヲ得ント又乞ヒテ粟〔ぞく〕ヲ東山ニ買ヒ郡吏ヲシテ歳時ニ発歛〔はっけん〕セシメ其十ノ一ヲ以テ之ヲ文庫ノ資トナシ其贏余〔えいよ〕ヲ以テ郷里ノ民庶貧ニシテ給セス病テ薬スルナキモノニ与フルヲ得ハ臣死ストモ憾〔うらみ〕ナケント有司以テ聞ス藩侯其誠意ヲ嘉シ尽ク其乞フ所ヲ允ス即チ書庫ヲ作り青柳館文庫ト名ケ之ヲ医学館ニ属ス蔵粟ノ倉ハ之ヲ東山松川村ニ建テ以テ其宿志ヲ成スヲ得タリ松崎謙堂青柳館ノ碑文ヲ撰シ堀田侯正衡碑額ヲ書シテ青柳館文庫之碑ト曰フ戊辰ノ乱後碑石ト共ニ廢タレ書籍亦從テ散逸ス深ク惜ムヘシ文蔵天保十年〔1839〕己亥三月十四日歿ス享年七十九、江戸高田金乗院ニ葬ル』

「伊達家史叢談」9(伊達邦宗)・「東藩史稿」卷之23(作並清亮)・「仙台人名大辞書」(菊田定郷)・「仙台先哲偉人録」(仙台市教育会)・「宮城教育」第365号郷土人物号(宮城県教育会)等にも、その伝が載っている。詳伝には「青柳文蔵翁伝」(岩手県図書館協会編)・「青柳文蔵翁伝」(宮城県図書館編)等がある。

注(2) p. 18注(4)参照。

注(3) 今の中央警察署傍から東三番丁に通ずる横丁を通称赤井横丁と呼んだ、この東二番丁東北角に寛文絵図に現われる赤井次右衛門屋敷があったことによる。

注(4) 儒医。名は弘光、字は黄美、通称道可、確斎と号した。本姓佐藤氏、藩医渡辺道甫の嗣となる。性極めて聡敏、医を医する医たらんと江戸に留学、碩学細井平洲の教えを受けること5年、一旦帰郷、更に関西諸国に赴き、碩儒大医に学んだ。帰って医学教授に抜擢された。医学館の独立は彼の建議によるものであった。医学館には漢方のほか、一関の佐々木中沢、荘内の小関篤斎を招いて蘭科を置いた。後世その卓見を称せられる。文化7年〔1810〕8月21日歿、仙台新坂通充国寺に葬る。

注(5) 江戸時代、謝礼を受けて他人の訴訟の代人となった人。代言人。公事とは民事訴訟をいう。

注(6) 宮城県図書館が、昭和59年3月、「青柳・今泉・大槻・養賢堂文庫和漢書目録」を編集発行した。その中の、「青柳文庫」について、次のように解説している。

『この文庫は、青柳文蔵が仙台藩に献本して創設された「青柳文庫」の蔵書であり、天保2年から明治維新までの約50年間、仙台医学館地内（現東二番丁中央警察署）に公開されていたものである。

そもそも、この文庫の旧蔵者であった青柳文蔵（仙台藩磐井郡松川村出身）は、若くして江戸に遊学したが貧窮の身であったため賤業もいとわず種々の職業を転々とし、後には法制を学び訴訟を扱う公事師として財を成した。文蔵は元来、自分の蔵書に「青柳館文庫」の蔵書印を捺して本を大事にする愛書家であったが嗣子がなくその蔵書の散逸を案じていた。一方、学の志があっても書を求めることのできなかった青年時代を顧みて、文政12年3月、自分の蔵書を衆庶の縦覧に供したいので仙台北城下の一ヶ所に書庫を建立する土地を賜わりたいと願い出た。仙台藩府はこれを許可し、医学館内に百余坪を授けた。翌天保元年閏3月、文蔵は早速2,885部、20,050巻、9,937冊の蔵書に維持資金千両を添えて献納したところ藩主よりお目見得を仰付けられ、十人扶持を賜わりその篤行が賞されたと伝えられる。同2年7月書庫が落成し、「青柳文庫」と名付けられた。こうして文蔵の志は果されたが後に明治維新の騒乱の中で文庫は廃止となり、また、医学館も官立英語学校に転じたため蔵書の大半は散逸してしまった。

明治14年、宮城書籍館（宮城県図書館の前身）の創立に際し、当時保管の任にあった宮城師範学校から引き継がれ本館蔵書の母体ともいわれていた。第二次大戦中は、幸いにも安全地への疎開により全図書が焼失を免れた。現在は、459部3,339冊となっている。なお、この文庫は医学、法律、折衷学派の書を中心にした幅広い蔵書であり、また天保

年間にすでに一般の閲覧および借覧を許したこと、目付2人が配されていたことから公共図書館の祖ともいわれている。蔵書印「勿折角勿卷腦勿以墨汚勿令薰蚊勿唾幅揚」は有名である。』

「本食い蟲五拾年」（常盤雄五郎）の中にも「青柳館文庫」の1編がある。

注(7) 江戸後期の儒学者。肥後の人、儒学教授として掛川侯に仕える。朱注を奉じ漢唐の注疏を究めた考証学者。有名な「謙堂日曆」はその日記。

蛮社の変に際して渡辺華山の赦免運動に尽力した。弘化元年〔1844〕4月21日歿、74才。

注(8) 「青柳文庫記」（文政12年〔1829〕松崎謙堂撰）の全文が「事実文編」次編14（五弓久文編）に収載してある。

注(9) 「本食い蟲五拾年」（常盤雄五郎）に、『文庫前には「青柳文庫記」という碑が樹ててあった。碑文は堀田正衡題額、松崎復撰文、男谷忠孝書であった。のちこの碑は明治九年に、石面の文字を削り、松井某の碑に使われて満願寺にあったが、終戦後その姿を消した。明治四十三年に横沢浄らが発起人となり、昔の石摺があったのをそのまま石に彫って、宮城県図書館の前庭に樹ててあったが、戦災のため断碑となっていた時までは私も見知っているが、いつの間にやら影もなくなったのは惜しい。』

また、「仙台風俗志」（鈴木省三）に、

『…当時は館前に碑あり青柳文庫碑といひ松崎謙堂の文を刻したるものなりしがこれ亦維新の際に取り払はれ割烹店竹の舎の沓ぬぎ石となりてありしを外国語学校教師松井某の墓碑となし今は〔昭和12年〕元寺小路満願寺境内にあり後有志者相謀り同じ大さの石に原碑本の文を摹刻して宮城県図書館内に之を建てたり』

「仙台」（小倉 博）にも、

『碑は明治9年喪はれたが、四十三年有志の人々旧碑の石摺を以て新に石に刻して建てたのが今〔大正13年〕ので、書庫は今憲兵隊に遺ってゐる。』とある。

資料 宮城県史11

仙台市史第4巻